

春に想う

わたなべ つとむ
渡邊 努

●政府関係法人労働組合連合（政労連）書記長

この原稿を執筆している段階では、街はまだ寒風吹きすさぶ中にありますが、組合の闘いは「春」まっただ中にあります。言うまでも無く、春の闘い「春闘」です。2023春闘は賃上げに大きな焦点があたり、世間からの注目度は例年以上、多くの仲間にとって久方ぶりに希望の持てる闘いだと感じています。ベアを勝ち取る闘い、これはボルテージも大いに上がろうというものです。

しかし…私たち政府関係法人の仲間にとって、春の闘いは、「決める春」ではなく、「決められない春」なのです。何故か。独立行政法人を始めとする政府関係法人の多くが、行政の一端を担う立場上、国からの運営費・交付金を主たる財源としていることから、労働条件決定のプロセスにおいて、国公、すなわち、人事院勧告の影響を免れない仕組みになっているからです。大半の法人理事者は国公準拠に固執し、春の段階では有額回答をおこないません。国が決めたことに寄りかかっているうちに、自ら考え判断することを止めてしまったのです。政労連の多くの仲間は、労働基本権を持って闘っているにもかかわらず、賃金・労働条件は春に決まらない、勝負はいつも、夏の人事院勧告以降に持ち越しです。年を越して、次の春の闘いが始まるようとしている時期まで給料が決まらないことだってあるのです。だから、私自身の中で、春という季節は悩ましいし、嫌いです…。

春が嫌いな理由は他にもあります。

それは「別れ」です。春は、そもそも、別れと出会いが交錯して何とも気分が晴れないのです

が、自分は圧倒的に、別れる、離れる、去る、という、表向きネガティブに捉えられる変化が苦手です。約半世紀に渡る自分の人生においては、出会いの前に、春＝別れというハードルが立ちただかつてきました。

そんな自分ですが、組合活動に深く関わるようになってから、良いのか悪いのか、ものごとの裏を見る、多面的に捉えていく癖ができました。別れ難いということは、その出会いが良い出会いだったということの裏返し、と、いつしか考えられるようになりました。

組合役員になってみて、思えば、組合活動は様々な出会いの連続。別れを惜しみ、過去の出会いを振り返ることも大切ですが、今ここで出会っている人の悩みにどう向き合うか、今起きている課題にどう取り組むか、常に「今」を乗り切るための最適な判断を問われて来たと思います。

その意味で、自ら考えぬ理事者、主体性を失った経営者、自律的な組織運営ができない役員に何を問うのか。今仲間たちが何を求めているのか、私たちにとってあるべき労働条件はどういうものか、常に、今必要なもの、やらなければならないことを考え、要求し続けていくことしかないのかもしれない。

答えの返ってこない交渉になるかもしれません。それでも、組合は今を生き、今を求めています。

少し、前向きになってきました。でも、まだ、春は好きになれそうにありません。